2023 年度学校評価報告書

2023 年 4 月 1 日から
2024 年 3 月 31 日まで

学校法人コリア国際学園

Ⅰ．概要

１．建学の精神

グローバル化・情報化が加速する21世紀の国際社会においては、柔軟な発想と幅広いコミュニケーション能力を兼ね備え、問題解決能力に優れた人間が求められている。

コリア国際学園は、在日コリアンはじめ多様な文化的背景を持つ生徒たちが、自らのアイデンティティについて自由に見つめながら、確かな学力と豊かな個性を持った創造的人間として国々と境界をまたぎ活躍できる、「越境人」の育成を目指す。

全ての教育活動を通じて相互の信頼と協同を深め、地域社会に根ざし、世界に開かれた国際学校として、東アジアはじめ世界の持続可能な発展に貢献する。

２．教育理念と目指す学校像

１）多文化共生／民族的アイデンティティと自尊感情を育むとともに、多文化共生社会の実現に向けた知識、技能、態度を身につけた人間を育成する。

２）人権と平和／人間の尊厳と民主主義を尊重し、世界平和を希求する普遍的価値を創造するとともに、地球的視野を持ち、持続可能な社会の構築に貢献できる人間を育成する。

３）自由と創造／真の自由を理解し、豊かな個性と多様性を基礎とした創造力の溢れる人間を育成する。

建学の精神および教育理念を具現化し、地域社会および国際社会に貢献する人材を育てる学校を目指す。少人数学校の特長を生かし、一人ひとりの学生の生活背景をしっかり掴み、学びと育ちを支援し、その夢の実現に向けて共に歩む学校を目指す。来るべき東アジア共同体時代を展望しつつ、それを教育空間に先取りし、多文化共生の成功した学校モデルを提供することを社会に対する責務とする。

Ⅱ．教育活動状況

2023 年度は開校 15 周年の節目の年であったが、創立以来の教育方針を再確認するとともに「わかる授業」、「楽しい学校」作りを目指して教育活動を進めてきた。

コリア国際学園は、昨年度にも引き続き KIS 教育理念に基づいた学校運営の永続性確保、教育活動全般を中期的な拡大発展に向け反転させて行く方針のもと、KIS コース・IB コース・K-POP エンターテイメントコースの各コースをより充実させ、生徒募集、運営基盤改善のために全力を投じてきた。

1．楽しい授業で学力を引き上げ、「越境人」に相応しい「多文化共生」、「人権と平和」、「自由と創造」を意識できる生徒を育てることに尽力してきた。

①楽しい授業、学びの起きる授業を目指して、グループワークなどの学び合いやアクティブラーニングの拡大を強調して一定の効果があった。アクティブラーニングの一つの具体例として、いわゆる「反転授業」に全学で取り組むという方向性を打ち出し、2 回の教員研修を実施して、2024 年度からの段階的実施に向けて準備を進めることができた。

②「生きる力」を「リベラルアーツ(自由になれる技)」として捉え、2024 年度全面実施に向けて、その

助走として後期から「土曜講座」シリーズを企画し実施することができた。

③K-POP コース生徒の増加につれ、進路を具体的に模索しなければならない中で、ⅰ在校生に向けてはソウル公演芸術高校と連携ができ、夏休みのプログラムや半年ほどの留学制度の創設を提案することで好意的な反応を得ることができた、ⅱ韓国に進学したい生徒に向けては、実用ダンスや実用音楽系の大学の指定校開拓の必要がある、ⅲ日本国内に進学したい生徒に向けては、4 年大学のほか専門学校にも視野を広げる必要がある。

K-POP コースは、設置から 3 年間の第一段階を無事終え、2024 年度から新しい体制に移行する準備ができた。より工夫された訓練プログラムと、韓国の多数の芸能事務所に定期的に生徒の成長記録を見てもらう体制ができた。

④留学生の受け入れに向け、韓国の韓日協会のほか、新たに中国・香港を対象にした New Horizon Education、韓国のチャンウォン留学院とも協定を結んだ。NHE は香港の教育博覧会に参加したので、KIS 学園パンフレットの中国版を作り支援した。

⑤IB コースは、全面拡大に向け、方向性を打ち出すことができた。現在、高 2 と高 3 生で選択することになっているが、中 1 から高 1 生徒が履修する MYP 課程を 3 年後の 2027 年度から導入することを決めた。3 年間の準備期間の中で、全生徒が十分履修できるよう学習能力や学習態度を固める必要がある。

⑥IB の一つの手法でもあるが、科目横断的共通テーマ学習週間を初めて導入することができた。2023 年は関東大震災 100 周年でもあったが、「災害と人間の安全」を共通テーマとし、5〜6 月にトルコ・シリア地震災害支援活動(トルコ出身の方を招いて講演、生徒会とユネスコ委員会を中心に 2 回の駅前募金)に取り組んだ。7 月には気仙沼ボランティアに 4 名が参加、10 月末には茨木市内の 4 つのユネスコスクールに合同駅前募金活動を呼びかけて実施し、トルコの被災者に伝達した。

共通テーマ学習週間(8/28~9/1)の期間中は、理数科も含めて、地震の起こるメカニズムや地震をめぐる文学作品、関東大震災時の朝鮮人虐殺問題などを取り上げて、一つのテーマと関連して多方面からの理解を高めることができた。

⑦今後アジア途上国との接点を増やして行くという方向性を打ち出し、手始めにシェアリングという外部団体のプログラムを積極推薦して、4 名がタイの山岳少数民族地域のボランティアに参加できた。

⑧韓国研修も城南市青少年財団プログラムの復活(最大 10 名参加)、全羅南道教育庁国際教育院(2 名参加可能)の夏休みプログラムへの新規参加など滞在費無料の安価なプログラムを用意することができた。今後も各教育団体などの招請プログラムを研究して機会を増やして行きたい。

⑨李熙健韓日交流財団より多額の支援を受け、今後 3 年間、IB コースの全学年実施、反転授業、リベラルアーツ科、3 言語大会の規模拡大、アジアへの展開、KPOP コース充実化、KIS カルチュラルセンター運営に充てる事業推進計画が策定された。

⑩各科目の全国共通学力確認試験などを導入し、学力向上の客観的目標を持たせ、毎年成長を確認できるようにとしたが、数検の検討をしたことに留まり、結局新たな導入には至らなかった。来年度はまず希望者を中心に試験的に実施して、全校生徒の参加を検討したい。

2. 生徒が成長できる楽しい学校作りを目指して取り組んだ。

①学習に課題のある生徒について、情報集約と予防および即応体制を固め、早期の対応をするとして、学

事日程にない夏休み特別補習期間を作って対応した。来年度からは最初から学事日程に入れておく。

②生徒会および各生徒委員会の活動を支援する一方、部活の奨励、活性化に取り組みテコンドー、バドミントン、美術部などいくつかの部活動を新たに設立支援することができた。

③土曜日および休暇期間を利用した魅力あるプログラムを作り、生徒の多様な関心に応えていく方向で UNESCO の ESD Passport を使って、IB-CAS 活動（創造性、活動、社会奉仕のためのサポートネットワーク作り、NPO や社会機関と連係）を奨励した。

④KIS 越境人賞を新設し、困難に立ち向かって、個人またはグループで、それを乗り越えた人について、生徒の投票と教員推薦で選抜し、卒業式・終業式で表彰するようにした。

⑤地域との接点を拡大し生徒募集にも繋げる意図で、土曜日の遊休施設を利用して KIS カルチュラルセンターを作り、後期から実施することができた。韓国語教室に 4 名、KPOP に 2 名が有料受講している。今後、広報活動を積極展開することで拡大を図る。

3. 各部門が重点項目達成に向け注力した。

1）教務部

①授業を通じて「人・多様性・学び」を尊重する心を育てることを念頭に特別授業の企画、実施、科目横断的共通テーマ週間を通して社会との繋がりを深めるともに、課題探求型学習など生徒の主体的な学びを中心とした授業を目指し、問題解決能力、コミュニケーション能力、思考力、表現力等を育成することに重点を置いた。

②教員研修や研究を通して、授業の質の向上を図り、基礎学力の伸長・向上を目指して次年度からの反転授業実施に向けたアンケートの実施、現状や問題点を把握した。

③教務事務等全般を不断に改善していくため意識的に取り組んできた。

２）生徒支援部

①建学の精神、教育理念にそって自主的で創造的な学校生活、集団生活、自治活動を展開できるように支援し、担任と連携しての生徒指導に尽力、相手の立場を尊重し互いに認め合える生徒を育てることに注力した。

②生徒指導において、生徒が自身を個性的存在として認め、自己に内在しているよさや可能性に自ら気付き引き出すこと、自他の個性を尊重し相手の立場に立って考え行動できる相互扶助的で共感的な人間関係を作り上げること、問題解決的生徒指導は「担任⇒生徒支援部⇒校長・教頭」で対応する体制を徹底すること、常日頃から生徒と教職員間の信頼関係を深める努力をし、生徒が相談しやすい環境を確立すること等に力点を置くこととした。

③生徒会の自主的・主体的活動を最大限支援し、新入生歓迎合宿、体育祭、文化祭、卒業式第 2 部など学校行事の企画運営に尽力するとともに、KIS Café 委員会・広報委員会・図書委員会・美化委員会・放送委員会・文化委員会など委員会活動を活発に進めてきた。3 言語使用イベントや欠席遅刻撲滅キャンペーンなど生徒による各種キャンペーンの計画実施、豊川フェスティバル・箕面市立国際交流協会主催多民族フェスティバル等地域イベントへの積極的参加を推進した。

3）進路指導部

①生徒の進路保障の観点から、高卒認定試験に頼らない進路実現を目指して、指定校推薦枠及び本校卒業資格で受験を認める大学を増やすべく、依頼文送付や資格審査の申し込み等を進めた。
②社会に出た後の自分の役割を意識させる進路指導を行い、進路デザインを考えさせることに関心を払ってきた。
③進路実現に向けたきめ細かなサポートを行うが、出願等の手続きにおいて生徒の自立を促す指導に徹底し、先を見通した早めの指導を行い、生徒の選択の幅が狭まらないよう留意することとした。